LRRI オンラインフォーラムのご案内

“利他を巡って：利他の土木”

◆趣旨：土木学会学会誌令和 6 年 12 月号に小峯秀雄会員（早稲田大学教授）の“土木の責任・「利他」の土木へ”と題する記事が掲載（記事を含めた関連資料を別途添付）されました。年末に会員の皆様にご案内しましたところ，思いのほかの反響がありました。そこで会員＆非会員の皆さまのご参加を得てフリーなトークで意見交換をする機会を持つことに致しました。ご参加をお待ちしております。

◆日時：令和 7 年 3 月 12 日（水）14:00 - 16:00 （5 分の休憩を含む）

◆フォーラム形式：オンライン（Zoom）（下記からご参加ください）

https://us05web.zoom.us/j/87503071265?pwd=auPfGj8SUL2FZTFX2qFJrQf7gPAw6K.1

◆プログラム

・趣旨説明：安原一哉（LRRI）10 分

・話題提供者（敬称略）

小峯秀雄・松本仁菜（B3）・川邉 駿(M1)（早稲田大学） 15 分

村上 哲（福岡大学） 10 分

常田賢一（LRRI） 10 分

【小峯秀雄】

【村上 哲】

【常田賢一】

・自由討論 ファシリテーター 安原一哉（LRRI） 60 分

話題提供者と参加者との間の力を抜いたフリートーク

・まとめ 安原一哉（LRRI） 10 分

申し込み用 QR コード

URL https://forms.gle/qpCU5r4BtjP9Gv517

◆後援

・地盤工学会関東支部

・（一社）茨城県建設コンサルタンツ協会

◆参加料（無料）

◆お申し込み方法

右記の QR コードからお申込みするか

LRRI 事務局（staff@lrri.or.jp）へメールで直接申し込みください(3/7 まで)。

一般社団法人 地域国土強靭化研究所

ホームページ https://lrri.or.jp

〒311-0105 茨城県那珂市菅谷 4527

お問い合わせ staff@lrri.or.jp

【責任感】

土木の責任・「利他」の土木へ

小峯 秀雄
KOMINE Hideo
正会員
早稲田大学 理工学術院 教授

自問自答：土木の責任

政府、電力事業者、自治体などから技術アドバイスを求められるが、構造物の破壊や機能不全に陥らぬよう、その時点でベストと思える助言をしている。その土木構造物に問題が生じれば「自分の責任」になるからである。一方、予算や工期などという問題が、責任をあやふやなものにしてしまうことがある。予算に見合うように事業を変え、本来の目的がやや揺らいだプロジェクトになったり、工期を守るべく無理に事業を進めたりすることがある。

著者は、土木技術者を地球のお医者さんと例えている。[1] 実際の医者が患者に施術をするとき、価格の安い手術を勧めたり、限定された時間でやみくもに手術をしたりするだろうか。テレビドラマで、そういう医者は悪徳として描かれる。同様に土木業界を考えたとき、価格の安い工法、やみくもに工期を守る工事は「責任」という観点で、本当に適切であろうか。発注する事業者も、自らの身体を手術してもらうような気持ちで、丁寧な建設事業実施をお願いしているであろうか。こういったことを、土木学会は自問自答する時期にきているのではないだろうか。

教育の点でも自問自答してみる。医学では大学教授であっても、手術の執刀や患者の内診に第一線で活躍している。これに基づき、著者も現場での課題解決に応じ、毎年の年次学術講演会で、自らの最新の研究成果を口頭発表している。このような姿勢を次世代が目にする機会を創ることは、土木教育に従事する者の責任であると思う。

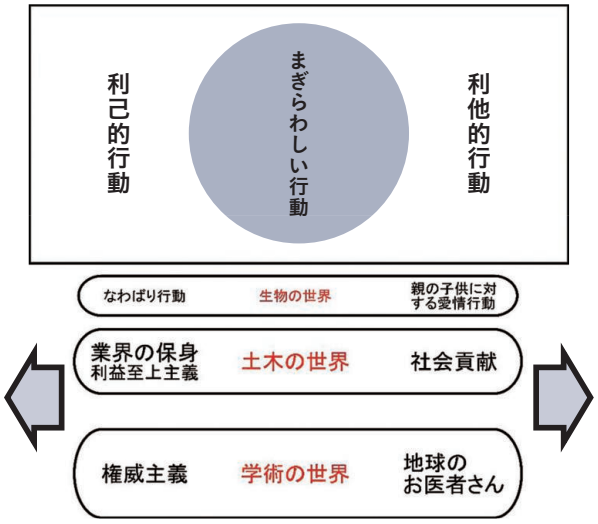

図1　土木の世界、学術の世界における利己・利他の概念

「利他」の土木へ

最後に、学生に気付かされたことを記す。ある学生から「土木構造物は、自然に還るべきである」と意見された。これを契機に、参考文献[2]を読み、先輩教授[3]と当該学生との議論から、土木学の責任は「利他」であることに気付いた。「利他」とは、利己の対義語で「自分のことよりも他人の幸福を願うこと」という意味である。土木学の究極の責任は、まさに「利他」と考える。図1に参考文献[2]に示された生物の世界における利己・利他の概念に、著者なりの土木の世界、学術の世界の利己・利他を追記した。

参考文献[2]では、生物学における人類は、利己的な「競争」よりも利他的な「共生」を大切にする社会の構築を模索すべきとしている。同様に土木学で考えれば、一業界の利己的な競争ではなく、社会の幸福に資する「利他」と自然との「共生」を踏まえた土木学の展開を模索すべきであろう。

参考文献
(1) 小峯秀雄：医学との比較に基づく土木の未来、電力土木、第413号、3～6頁、2021年
(2) 鈴木正彦、末光隆志：「利他」の生物学、適者生存を超える進化のドラマ、中公新書、2023年
(3) 安原一哉：連携、共創そして共生：あらたな地域社会づくり、LRRI会員&役員だより、令和6年7月号

「LRRI 会員＆役員だより」（令和 6 年 7 月号）

連携，共創そして共生：あらたな地域社会づくり

去る 5 月 24 日に，かつて，茨城大学教授を勤められた小峯秀雄先生のお誘いで，早稲田大学社会環境工学科地盤工学研究室の学生さんを中心とした皆さんに，“やがて 80 歳になる僕の考えていること”というお話をさせていただきました。そのお話をさせていただく数日前に，小峯秀雄先生から，「自然に帰ることのできるインフラ”に関心のある 3 年生がいるが，なにか助言をしてほしい」という依頼を受けていました。そのときは，「“自然と共生できるインフラ”という表現のほうがいいのでは？Eco-DRR を調べてみては？」と気楽にメッセージをお返ししたのですが，後で考えてみて，そもそも“共生”って何だったのか？具体的でわかりやすい“Eco-DRR”の事例が身の回りあるのか？と考え込んでしまいました。

色々調べているうちに，共生という言葉は，本来，生物学でつかわれていた言葉で，“二種の違った生物が一緒にすむこと”（新明解国語辞典（三省堂）第４版，1996）とありました。それがインフラと自然との共生というように他分野に援用されてきたものと想像されます。このことに関しては，ある著名な生態学者が間違った使い方だと批判していると聞いたことがあります。一方で，「広辞苑」（岩波書店，第４版，1991）には，共生には“共利共生”と“片利共生”があるとあります。このうち，“共利共生”という言葉はネット上にはなく，代わりに“双利共生”がありました。“共利共生”も“双利共生”も同じ意味だと思いますが，さらに考えているうちに，LRRI の社是にしています“先義後利”や“利他”の精神に通じるものがあることに気が付きました。生物学の書籍を探しているうちに，鈴木正彦・末光隆志共著：『「利他」の生物学（中公新書, 2023）』という本に出あいました。読んでいるうちに，植物の世界には“利他”と“共生”があるとのことでした。新しい気づきです。ここを参考にして作成してみたものが図１です。

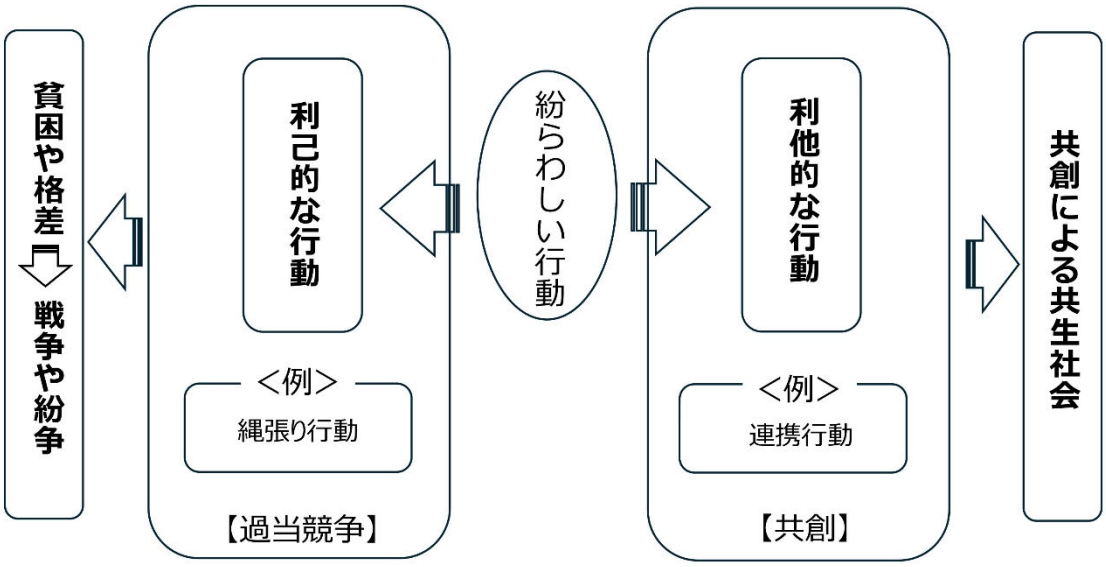

図１　連携，共創と共生

（鈴木正彦・末光隆志共著：『「利他」の生物学（中公新書,2023）』を参考に作成）

この図によると，人間の利己的な行動が貧困や格差を生み出し，それが紛争や戦争を引き起こす，という結論になります。逆に，利他的な行動によって戦争や紛争を避けることが出来る，ということになりますが，少々短絡的で稚拙な感じもします。

早稲田大学でさせていただいたお話は昔話が中心でしたので，話の途中で学生運動が激しかった頃（1970 年前後）のことを思い出しました。今の若い方には縁遠い遠い昔のお話ですが，東大安田講堂に“連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして挫けることを拒否する。”という落書きがあったとの報道を思い出しました。この落書きは本質をついていて今でも通じる力強いメッセージだと思っています。“一点突破，全面展開”などという過激派のスローガンもありました。

ところで，筆者は，現在，2020 年 4 月に設立された「茨城大学　地球・地域環境共創機構（Global and Local Environment Co-creation Institute: GLEC）」（それ以前は，地球変動適応科学研究機関（ICAS と呼ばれていました）に所属しています。任期は，令和 7 年 3 月 31 日までです。この組織は，“共創”を念頭に，“持続的な環境の共創に関する教育研究や社会連携の機能強化を図る環境分野の教育研究拠点を構築”することを謳っています。ただ，“共創によって共生社会を実現しよう“ということまでには言及していませんが，筆者自身は，”連携 or 連帯，共創そして共生“へとつなげていくことがこれからの日本の社会に求められていることの一つではないかと考えています。そしてこのことは，2030 年に達成を目指している SDGs にも通じるものとも考えています。

5 年目を迎えた LRRI は，このような目標を掲げて会員の皆様の知識と知恵を結集して，レジリエンスの高い地域社会づくりのための新しい考え方や技術開発を実現して，皆さまと共有してまいりたいと存じます。引き続き力強いご協力と御尽力をお願いする次第です。

写真 1　紫陽花（あじさい）

雨にこそ　とりどりの色　煌（きら）めいて

想いはめぐる　あじさいのとき

（令和 6 年 7 月 1 日　代表理事　安原一哉）